

<今回>216回目 2017年8月7(月)15時~18時 602号室

読書は8冊目「邪馬壹国の論理313P 四 より

<前回>215回目(17-7-24) 出席者9名

資料 17-07-024-1)前回のまとめ(清水)

-2) 新聞記事(小松)日本書紀の解説本紹介

-3)画竜点睛(富川)画聖の1例

## A 報告

小松さんとの文通。読書会に行きたいが体力的な問題でご迷惑をかけると遠慮。

津多屋10791円(1500・7)-291円

B 資料 2)は小松さんから読売新聞?文化文芸欄の建築家の古代史を第2のライフワークを切る抜いて送られてきた。山田宗睦氏の日本書紀の研究も本業ではない方の研究書と紹介。現代学会の風潮批判として取り上げている

3)海賦の様子を絵に著したという当時の画聖と同じような人の例として、画竜点睛の故事が紹介された。

## C 読書 p295 珍敷塚古墳 より

1)珍敷塚古墳の奥壁の絵画の観察と解釈。(多元の会のシンボルの)通称天鳥舟が左端に描かれている。太陽や星の円環、天の川に導かれつつ巨大な陸地に到着した(月はない)。巨大な靱状文と蕨手状文は靱としては大きく(五郎山古墳の例)塞か宮殿を表している。同心円と併置され祭祀的表現となっている。

2)斜めの線( $\alpha$ 線)は意図的に描かれ下部には巨大な異様な動物と思われるものが描かれている。月外のひきがえるなど中国思想の蟾蜍では解釈できない。倭人が1年後に到着した巨大な大陸を表すには倭人内部に伝えられた知識を中国の教養人が漢字で表現しようとしたのが訳の分からない文字になっている。

3)珍敷塚古墳は昭和25年採土の途中ぶつかり、破壊された。奥壁の岩絵の鮮やかさと容易に動かせられない大きさで危うく奥壁の巨大な岩絵だけが残った。開発の結果道路が通り、周辺は宅地になり、隣家のおばあさんが鍵を預かって見学者に対応してくれていた状態になった。高松塚古墳の扱いと明らかに異なる。どちらが大切なものになるか後代の日本だけでなく世界の古代史学者の手にゆだねたい。

4)謎の一点。空に浮いている人物、帆のような形の巨大な不明物、これは海賦の中の解説不明な文章群と対応している。九州絵画古墳の連続三角文様、同心円文様、わらび手文様など異質な文明(信仰)でその伝統が絶たれている。

倭人の南米大陸への航行について(英訳論文の原稿として書かれたもの)(準拠史料に重複が多いので略)

一)3世紀以前倭人は太平洋を越えて航海し、南アメリカ大陸西岸に到達したことがある。三國志を誇張と誤謬が多いとしてきた文章に巨大な数値は6分の1の短里で、年齢は2倍となっている(2倍年暦)ことを論証した。

二)裸国、黒齒国 表記のルールを確認し、実際の行程の日数、海流に従えば南米大陸に到達、方向は東南。実際の20世紀の冒険者の航行実例を示す。(略)

三)三國志と海賦の内容が一致する。持衰、1越3千里、卑弥呼の急使と果敢な王命、倭人について書かれた内容の一致の史料(前回まとめ参照)として海賦を提示している。

次回日程 17-8-25(金)15時から18時 601号室

9-1(金) 15時から18時 602号室

9-25(月)15時から18時 603号室